

きょういくの 形を問う

《きょういくの形》

期待の種を蒔き、芽が出て花が咲く

成長の時々を、みんなで讃え共有し合う



《授業実践への憧れ》

一度授業実践をしたら繰り返し実践意欲がかき立てられるバイヨン中学校、その背景からみえてくるもの

私たちが元気をもらった そのわけ

《グローバルな世界》

観光交流のうちは常に外国「グローバル」、事にあたり交流を重ねれば万国どこでも地域「ローカル」となる

NPO法人オアシス

バイヨン中学校開校 ― 期待膨らむカンボジアの大地に

徳定非営利活動法人オアシス 足立泰敏
特

「少しでも早くカンボジアへ行きたい。何とかしようよ。」の声が定例役員会の席で聞かれるようになってすでに一年。私たちNPO法人オアシスの現地での活動は、昨年1月を最後に中断を余儀なくされている。

翻って、2008年より始まった本法人のカンボジアでの活動。当国の社会事情や人脈とも適合し、多くの社員の参画を高めてくれている。その結果、毎年社員数の増加があり現在44名。緩い組織、緩やかな活動に加え「頼り、頼られる関係」が魅力になって組織拡大が進む。

学校施設や教員不足のカンボジアで、2013年、現地NGOの主導のもと、本法人も参加しバイヨン中学校を開校した。学区内のアンコールトム遺跡に因んで名づけられた「バイヨン」。クメール王朝700年の歴史を彩る気高き校名である。以後活動の拠点となった当校で、社員は専門分野を生かして特に理科・音楽・体育等の授業に取り組んだ。

その中で、開校記念事業として実施した運動会では、年間100時間以上の体育授業を積み上げ、三年の準備期間を要した。二度にわたって当校の先生らを愛知に招聘し運動会の実地研修をしたり、運動会用備品のコンテナ輸送も行ったりした。名実共に「相互に期待し、期待される存在」となった私たち。

運動会当日、その期待は予想以上の波瀾となって生徒および参観者すべてを飲み込んだ。記録動画を見るたびに感動が蘇り、地域と共に成長する新たな学校の軌跡を実感させてくれる。

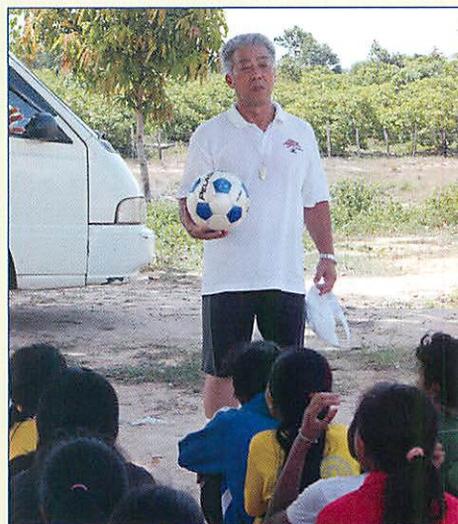
私たちの支援の幅が広がる中、当地の先生たちの授業実践が具体的になり、行事や部活動なども生徒たち自らの力で創設され成果も上げている。期待に応えるバイヨン中学校の成長を見るにつけ、私たちに生きるエネルギーが充電され、ますます期待が膨らむ。

退職公務員新聞 令和3年7月号より転載（一部削除）



協育の窓

2013年バイヨン中学校開校後のカンボジア支援活動は、開校事業に携わった関係から自ずと当校中心に。また、教職OB社員の増加に伴ない、その活動内容は授業実践へと特化してきました。



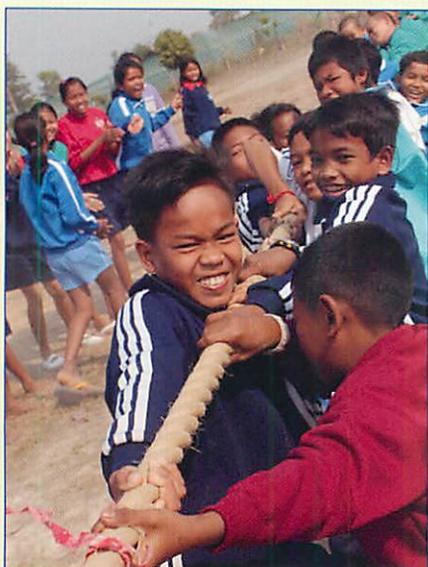
より具体的な授業づくりのための教材・教具、授業技術の提供。中でも体育授業の成果としての運動会の実践は、特筆できるものと自負しています。一人一人の学びの成果を総覧するための運動会ではなく、協働の成果としてのカンボジア流運動会を創造する高いハードルが課せられた実践でありました。

運動の技術・技能指導だけに留まらず、グラウンドの草むしりに始まり、トラック造り、鉢巻き作り、給食の提供などなど、期待への投資を私たちなりの方法で積み上げてきました。『協育』の広がり、支援活動への元気をたくさん戴いた活動になりました。



競育の窓

バイヨン中学校の教室掲示のひとつに、月例定期テストの個人総合点と順位一覧が貼り出してあります。生徒たちは特段気に留めるのでもなく、「どうせ私はできないもん!」といった風情です。勉強は、すべてが自分自身の内で完結しているといった受け止め方のようにもあります。



指導する側の先生たちは、生徒がいか
に学ぶかを前提とした授業づくりをする
のではなく、ひたすら教材をどのように
解説するかに腐心しているようです。
毎日の授業が、「楽しい授業」「活力
ある学び」から遠のいていくようです。

授業実践に当たり私たちは、課題をグループで挑戦させたり、演奏・演技・作品交流や意見発表を通したりしてそれぞれの能力・資質の違^を互いに理解し合う場を設定することを心がけてきました。他者を学びのパートナーとして意識することで、憧れを抱いたりフォローし合ったりの関係が生まれ、切磋琢磨する学習集団へと成長していきます。

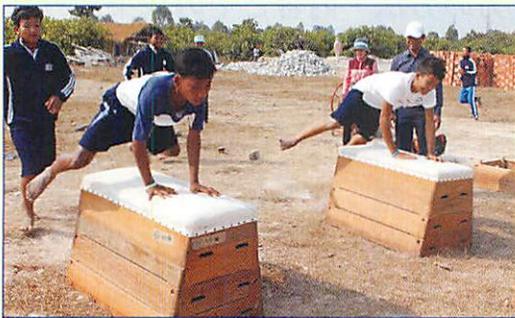
また、自分自身の能力を自覚することで他者理解が進み、相互の成長への好循環が芽生えていきます。全国大会で優勝・入賞するような陸上選手も出て、私たちの実践の延長線上に『競育』の具体が少しずつ見えてきています。



響育の窓



生徒たちにとって、学習成果を目で見て確認できるスキルを伴う学習活動は、相互に刺激し合う場が多く『響育効果』を高めていると言えます。また、多くの学習リーダーを育てることに繋がりました。



ルー校長を中心にバイヨン中学校の先生や生徒たちへ、さらに地域住民の意識の変容をもたらしてきている一連の『響育の力』に関わって、私たちは、その一端を担ってきていることに教育支援活動の意義と誇りを感じています。

開校当初、私たちが実践する授業にはほとんど関心を示さなかったバイヨンの先生たち。しかし、実践を重ねるにつれ先生たちの参観や補助も増え、同じ実践方法を自学級で試みる先生たちも出てきました。日本の学校での研修体験も加わり授業の資料作りや教室掲示が多彩に、まずは、先生たちから『響育』が動き始めました。特に具体的な教材・教具を使って学習目標をはっきり見通すことができるようなモデル授業は、先生たちの関心を高めていました。



私たちはこれら響育の可能性に応えようと太陽光発電施設を始めとしてPC・プロジェクター・電動ミシン（広島安田女子短期大学）・理科実験器具・運動用具・楽器など、教育機材を大量に寄贈しました。

また、環境教育でのごみ拾い活動では、地域住民の飛び入り参加だったりごみ処理への協力もあつたりと、学校が地域を動かすきっかけにもなっていました。



共育の窓

私たちの教育支援活動は、常に現地の期待や可能性を共有したものとは言い難く、自己満足に留まっていた場合もあったと反省しています。

紆余曲折の中であって、これらの課題解決の要点としてみえてきたことは、JST（現地NGO）代表、校長・先生たち、そして通訳との意見交流を深めることで、現地や学校現場の実情をできるだけ詳細に把握することでした。また、先生や市・州の教育行政官を7度にわたって日本へ招聘し、学校現場で実地研修を行ったことは、私たちの支援活動推進に大きな役割を果たしと言えます。



当初、支援活動の意識の根幹には、常に「提供」の二文字がありました。やがて、現地の期待がある程度捉えられるようになり、これらに向けての協力の方法・内容とその成果がみえてくるようになってきた時、『協育』『競育』『響育』の輪郭が位置づいてきたような気がしています。さらに、この過程を遡ってみると「信頼」の二文字が、私たちを常に支えてくれていたことに気づかされます。

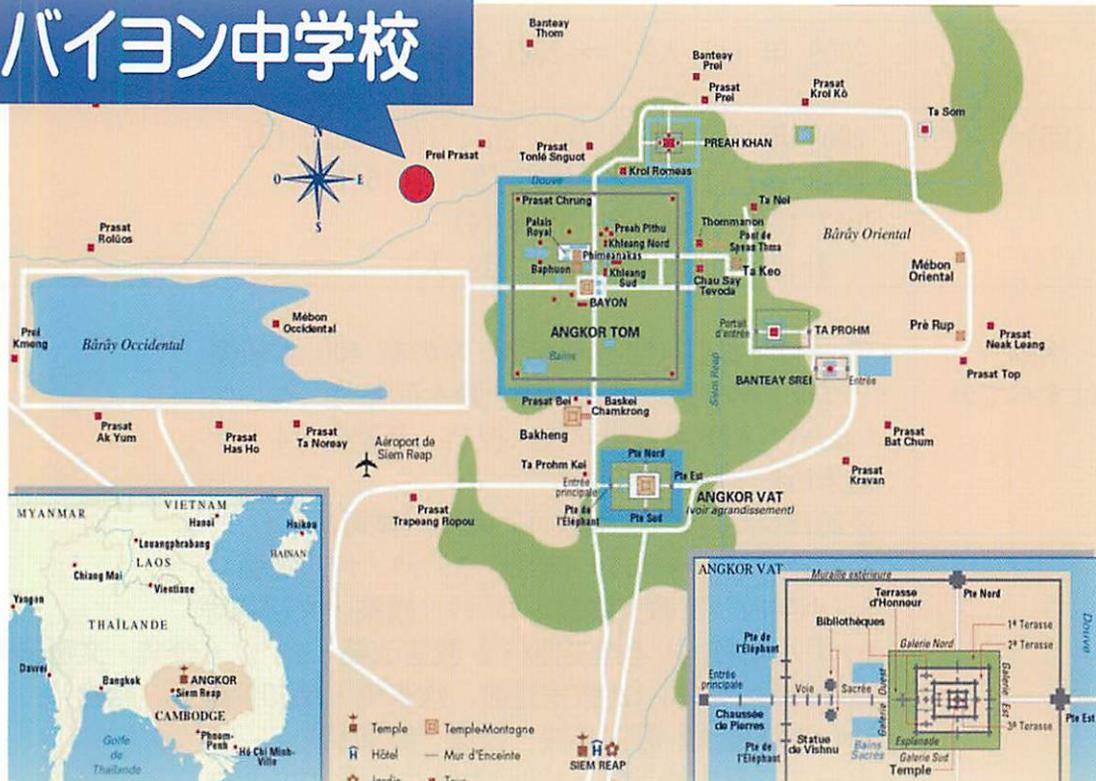
私たちなりの物心両面の提供は、実は私たちのこれまでの経験や実績の拡大再生産の場であり、それぞれの能力や資質をさらに磨く機会になりました。バイヨンの生徒・先生たち、現地の人々、そして私たちと共に手を携え進めてきたこれまでの活動は、共に育つ『共育』の姿を導き、結果としてそのことが、「生きる元気」を高めてくれていると感じています。

PO法人オアシス カンボジア支援活動データ (2009~2020)



項 目	内 容 (実数)
社員数	2009年(15人) ⇒ 2021年4月(45人)
定期訪問回数(回)	2009年(2) 2010(2) 2011(4) 2012(3) 2013(4) 2014(4) 2015(3) 2016(3) 2017(3) 2018(3) 2019(4) 計 35回(延訪問人数 224人)
支援活動施設 (主たる内容・活動) ※施設・学校はすべてシェムリアップ州内	<ul style="list-style-type: none"> ・アンコールワット参道(空港線道路) 木の樹 400本植樹 ・アンコール小児病院・舞踊学校・鈴木孤児院(マジック) ・シェムリアップ州教員養成学校(授業・運動会(4回)、苗木センター・焼却炉建設 ※2018年度授業実践数 19時間(体育)) ・アンコールクラウコミュニティセンター(給食・マジック・ナズ 養殖) ・チェイ小学校(3教室建設・マジック・授業・文房具等) ・チュップ小学校(1教室建設・2教室改装・マジック・授業・文房具等) ・アンコールクラウ小学校(2教室建設、炊事場・焼却炉建設、給食) ・スレイン小学校(2教室建設・授業・慰問品) ・鬼一ニ三日本語学校・カリック附属幼稚園(マジック・文房具等) ・コックバイン小学校・ワットスラムチェイ小学校(給食・マジック・文房具等) ・スーダイクマエ孤児院(マジック・慰問品) ・笠原知子小さな美術スクール(作品購入、絵画展2回、巡回展7校) <p>[バイヨン中学校 2013~]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教室・体育倉庫建設、 ・太陽光発電・バレーコート・鉄棒・砂場・サッカーゴール・WiFi施設等設置 ・マジック・運動会(4回)・支援品(6Fコンテナ2回、ダンボール輸送15、中古PC130台) その他教材教具多数 ※ダンボール輸送は主として衣類 ・授業実践(数学・理科・音楽・美術・体育・技術家庭・環境) ※2018年度授業実践数 111時間(5教科) ※2019年度授業実践数 154時間(内養成学校体育12時間) ※蒲郡中とのスワイプ授業(2回) 生命の海科学館との交流授業(1回)
招聘事業(学生・教員)	2010年学生2人(ホームステイ) 2013~17・19年教員各4人 2018年6人
国内展示事業	支援活動写真展3回 カンボジア子ども美術展2回 同巡回展(7校)
カンボジア関連支援事業 民間助成金額	2009年(6,108千円) 2010(5,901) 2011(3,678) 2012(2,697) 2013(3,997) 2014(1,950) 2015(50) 2016(550) 2017(1,250) 2018(303) 2019(146) 2020(0) 合計 26,630千円
カンボジア支援事業への 一般寄附額	2013年(2,183千円) 2014(1,162) 2015(982) 2016(617) 2017(954) 2018(680) 2019(727) 2020(763) 合計 8,068千円

バイヨン中学校



NPO法人オアシス 2021市民交流会

蒲郡市教育委員会後援

日時 令和3年12月11日(土)13:30~16:00

場所 蒲郡商工会議所コンベンションホール

受付 13:00(写真展有り)

開会 13:30

内容 第1部 ◇未知の世界をつなぐマジック交流
◇カンボジア報告「きょういくの形を問う
— 私たちが元気をもらったそのわけ」

第2部 参会者との「フリートーク対話集会」

第3部 報告者とパネラーとの「パネルトーク」

閉会 16:00

平成28年9月8日(木)

No. 5



蒲南小
校長だより

~古くて新しい蒲南小~



明日、9日(金)カンボジア・
シェムリアップ州教員研修使節団 来校

明日、9日(金)、カンボジアから
先生方が蒲南小を訪問されます。

シェムリアップ州の学校教育条件の改善、また、新たに設置された中学校での新教育実現のための視察団として、教育関係者の方が3名、通訳の方が1名みえます。

そして、日本とカンボジアの架け橋として、「カンボジアへの支援活動」を進めてみえる「NPO法人オアシス」理事長の足立泰敏先生をはじめ、前蒲郡市教育長の平岩尚文先生ら総勢10人がいらっしゃいます。蒲南小の子どもたちの様子を見ていただく良い機会となります。

足立泰敏先生は、平成18年度まで形原中学校長を務め、退職された後は、神ノ郷町で息子さんと一緒にミカン農家としてミカンなどを栽培されています。一方で、大学の非常勤講師として、教員をめざしている学生さんたちの指導をされたり、三河各地の学校の「授業研究会」に招かれ、講師として活躍されたりしています。

本年度の蒲郡市の研究校の蒲郡西部小学校でも、これまで指導を重ねてこられ、当日の学習指導研究会でも「社会科部会」の助言者を務められます。

蒲南小の子どもたちには、裏面の内容のことをできれば、朝・夕の会などで、担任の先生方から、子どもたちの学年に応じた内容・話し方で伝えてもらえるとうれしいです。

児童玄関には、カンボジアの子どもたちの写真や子どもたちの描いた絵なども展示してあるのであわせて伝えてください。

カンボジアの授業では、子どもたちが挙手する習慣がないことを足立先生からうかがいました。

一生懸命発言しようとする蒲南小の子どもたちやそれを支えている先生方の姿を見ていただきましょう。

9月9日(金)訪問日程

- 3限 学校概要説明
- 4限 施設見学
給食
- 5限 授業参観
- 6限 質疑

蒲南小の子どもたちの
元気に頑張る姿を見
ていただきましょう。

を読みながら、私なりに工夫したものです。先生方は、さらに、工夫して話していただければありがたいです。

- 皆さんは、カンボジアという国を知っていますか。また、カンボジアということばを聞いて、どんなことを頭に浮かべますか。地図を見ると、東南アジアのインドシナ半島の南の方にある国です。先日のリオ・オリンピックでは、カンボジアの国籍を取得した、猫ひろしさんが、マラソンに出場しました。
- 昔、昔（9世紀から15世紀）、カンボジアの地を中心に栄えたクメールという国が、インドシナ半島全体を治める大きな国になって、素晴らしい文化をつくりました。しかし、その後、2回目の大きな戦争（第2次世界大戦）のあと、カンボジアの同じ国の中で、戦争が起きて、多くの人々が亡くなり、学校や病院などの施設、これまでの伝統文化がなくなってしまいました。
- その後、25年ぐらい前から、日本をはじめ、世界の国々が支援をして、カンボジアの経済が復興していきませんが、いったんいなかの方に行くと、「電気もない昔ながらの生活」を多くの人々がしていて、貧しい子どもたちがいっぱいいます。私たちは、あたりまえのように学校に通っていますが、地域によっては、学校がないところもたくさんあります。カンボジアでは、若い世代の子どもたちがたくさん増え、子どもたちの教育が国の将来を決めていく大きな問題となっています。
- そんなカンボジアの子どもたちを見て、私たち「オアシス」は、学校建設だけにとどまらず、よい授業づくりのための先生方の勉強、給食という制度をつくったり、運動会を行ったりしてカンボジアの子どもたちのためになることをしようと努めています。

私たちNPO法人オアシスは、カンボジアでの支援活動をする中で、縁あって「小さな美術スクール」を主宰する、笠原知子先生と出会い、交流を続けてきています。氏は、日本の高校での美術教師を退職後、単身カンボジアへ永住、2008年より、「小さな美術スクール」を開校し、絵筆をもった経験のないカンボジアの子どもたちに無償で絵の指導をしてきています。

カンボジアの大きな空の下、

子どもたちが「子どもの時間」を楽しめるよう、

子どもたちの輝いた目に、もっと喜びが増すよう、

そして、心が満たされるよう……。

「子どもの森ギャラリー」パンフレットより抜粋